

# 寺院分布と地域評価試論

## 領 家 穢

### <はしがき>

一つの対象は、そのもの自体として存在している面と共に、そこに住む人々によって何らかの意味を附与されることによって存在を認められるという面を持っている。社会調査の現地調査で遭遇することの中には、この種の問題が含まれている。「お宅の寺はどこですか」という質問に対して、次のようなやりとりが行なわれる場合が屢々みられる。「うちの寺といいますと……」「お宅の檀那寺です」「そこのお寺ですよ」「といいますと……」「〇〇寺です」「何宗か御存じでしょうか」「さあ……××宗ではなかったでしょうか」といった経過は相手によって種々様々である。

調査者の知りたい内容によって追求の仕方もさまざまであるが、一応寺院の宗派に関して整理した場合、(1)檀那寺なるものの自体が分らない。従つて自分の家の宗旨が何であるか分らない。(2)自分の家の檀那寺がどの寺であるかは知っているが、その名前も宗旨も知らない。(3)自分の家の檀那寺がどの寺であるかは知っているが、その名前だけしか知らない。あるいは宗旨だけしか知らない。(4)檀那寺の名前・宗派を知っている。(5)檀那寺について更に詳細な知識をもっている。といった区別が考えられよう。以上の簡単な例から明らかのように、一つの寺院は(1)自己に対する関係といった面と共に(2)その寺院が社会的に附与されているさまざまな意味づけの中で、どのような位置を占めるものであるかといった面に関して考えられ、(3)自己の行動の対象として、どのような指向の方向づけを行なうかといった面からも考えられる。社会的存在としての寺院は、この意味ではも

の自体としては考えられない。それは常に何らかの象徴としての意味をもつものである。このような観点からみた場合、寺に附せられる名称は、その程度において社会の中における寺の地位を示すものである。上述の例におけるように、寺院を見る見方は、実に種々雑多である。(1)山号・寺号、(2)所属宗派・本末関係・寺格 (3)檀信関係 (4)由来 (5)その他当該寺院の構成要素に関する諸特性といったものが、宗教的な観点からみた場合にも挙げることが出来よう。寺院分布という言葉の中には、これら宗教的契機のはかに、宗教外的な契機の一切を含む場合が考えられる。これら諸契機の中から、宗派という契機をとり出して、宗派別寺院分布を考えるという場合、いま一度その立場を明確にしておくことが必要であろう。

### <宗派と地域社会>

一つの寺院がある宗派に属しているということの意味を考えてみよう。ここにもまた幾つかの問題が含まれている。(1)現実的には、その宗派の要求する戒律その他の規制に従うことを意味し、(2)過去において、このような規制に従うことが要求される必然性をもっていたということである。論理的には未来に関する問題をも含んでいることになるであろうが、この点に関しては分布が現在に関するものであるから一応除外しておこう。ところでこのような宗派所属はその前提として宗派分化を予想しないわけには行くまい。一つの宗派に属していることを明示することの中には、他宗派の存在が当然前提となっている。従って、まず宗派所属が具体的にはどのようなものとして考えられるかについて考えてみよう。

この問題は二つの側面をもっている。一つは宗

派所属の内的な意味であり、一つは形式的な側面である。

(I) 宗派所属の実質的側面 ここには三つの契機が考えられ、①教義 ②儀礼 ③宗派を構成する成員の問題である。④は更に僧職者と在家の成員に分たれる。一つの宗派に所属することは、一つの教義を信ずることであり、教典からその解釈に至る一連の層を含んでいると同時に、儀礼の手続とそれに要する装置——寺院もまたこの装置の一つとして考えられるが——が考えられる。それは教義からの必然的な外界——対象——に対する働きかけの形式を規定することになる。就中、儀礼に介在するものとしての僧職者の問題は、その資格・能力という点において重要な問題を含んでいる。宗派所属は従って具体的には、教義・儀礼に関して、教線拡張の基本的問題と連ってくる。

(II) 宗派所属の形式的側面 宗派はその持続に関しては、集団としての意味が強調される。②宗教集団内部での宗派の位地 ④宗教外的社会との関係といった二つの側面が問題となろう。前者は更に(i)他宗派との関係(ii)上位集団との関係(iii)他宗教との関係に分たれ、後者は、(i)他の集団との関係(ii)全体社会との関係に分たれる。

④(i)に関しては、一つの宗派に属することと他宗派に属すことの包摂関係であり、寺院に関しては、同時に二つの宗派に属しうるや否やの問題である。(ii)は具体的には神道・キリスト教といった宗教との関係であり、明治の神仏分離以前においては、仏教と神道の神々の間に習合が行われ、重複関係が存在し得たのである。宗派がこのような他の諸仏諸神に対して当然異った立場をもつことは十分考えられるところである。(iii)については省略する。

④(i)宗派所属が檀信関係に変化を及ぼし、所属単位——個人としての資格においてとか、家としてといった場合の区別——と重要な関係をもつと共に、他のさまざまな機能集団との間に、離隔(無関係)・対立・重複・促進の関係に立つ場合のあることが予想される。

それと同時に、地域との関係においてはその地域の統合に対して、無関係・促進・対立の場合の起ることが考えられる。(ii)に関しても同じようなことが言いうると共に、その逆の場合、地域ないし全体社会からくる制約に対して服する場合も考えられる。

以上において宗派所属の意味を概観したが、基本的には宗派の意味づけの主体を漠然と人間という観点において提えたに過ぎない。一つの寺院の宗派所属を言う場合、われわれに直接に与えられているものは、分類された宗派の別の中における位地であり、宗派別分布は上記のような意味を、分類を必要とする限りでの社会に関連させて考えたものである。

われわれの研究は、従って次のような仮定から出発することによって進められる。上記の演繹的な方法に対して、直接的に与えられた特定の宗派に属している寺院が、地域的にどのような分布を示しているか、その分布の形式的特性から、上記の関係におけるあるものが証明しようという仮定である。就中、地域社会と宗派との関係においてその両者の関係を、各宗派の比較的方法によって明らかにしたいと考えるものである。

仮定 1. 宗派が意味を持つのは、少くとも二つ以上の宗派が見うる社会に関してである。

従って、各宗派全部について、その性格の比較が可能となるのは、少くとも全宗派が、そのさまざまな存在形態において見ることの出来るような広域社会においてである。

仮定 2 近畿二府五県の範囲は、寺院の数および宗派の存在状態からみて、一応かかる広域社会を考えることが出来る。

仮定 3 一定面積に区画された地区は、他の条件が等しいなら、相互に区別を持たない。従って、寺院の包含の点において、若し相互に何らかの相違を認めることが出来るならば、次の二つのうちの何れか、若しくは両者による寺院相互の間の干渉があったことによるものと考える。

(i) 異宗派に属する寺院相互の干渉

## (ii) 同一宗派に属する寺院相互の干渉

この場合、寺院相互の干渉とは、ある地区に存在する寺院が、その地区に他の寺院が存在することを、積極的に促進し、あるいは消極的に否定する関係を有する場合をいう。これら促進・拒否に関連して、全く無関係の場合をも包含することにしたい。

Aなる寺院の存在が、Bなる寺院の存在に対して干渉するか否かは、すでに寺院がさまざまな形で存在していることからみて容易に判定し難いものである。もとより、Aなる寺院とBなる寺院の間の関係は、歴史的に規定された寺院相互の関係であって、さきにあげた宗教的意味における人的要素としての、住職、檀家集団、さらには保護者の関係によって定まる関係でもあれば、宗派の布教方針と言ったものによっても異ってくる。何れにしても具体的な寺院を構成する人々の要素の媒介によって、その人々の思われた意味によってこの関係は解釈されるのである。が、ここではむしろ逆に、そのような解釈に従って行われた寺院分布の結果から、このような干渉の存在を客観的な事実相互の関係として捉えたいと考える。干渉の存在を明らかにするために、次の仮定を置く。

仮定4. 各宗派は夫々相互に独立であって、その宗派に属する寺院は、その宗派自身の性格によって決定される。従って、一つの地区内における宗派の共存関係は、寺院相互の接触がランダムである限りにおいて、あらゆる宗派とのあらゆる組合せが可能である。

このような仮定から出発して、一つの地区内における宗派分布の形式相互の間にみられる傾向を分析する。すなわち、干渉の意味のうち(i)と(ii)については、その性質が異っており、従って、この両者の検出は方法を異にすると言える。まず(ii)に関しては、宗派別・寺院数別・地区分布によって、宗派の特性を明らかにしたいと考え、すでに一・二の試論でこれを扱った。

(i)に関しては、本論文で取扱うことにする。この点に関して、寺院の意味づけについて、その社会との関連から整理しておくと、①寺そのものと行為者（この場合は意味づけを行う者）との関

連だけが問題とされる場合、この場合には他の寺との区別の意図は存しないか、または意識の中で顕在化しない。②他の寺とその特定寺院との区別の点に重点がおかれて、その寺の名称が問題となる。この場合、宗派は問題とならないか、または意識の中で潜在的なものとして存在している。この場合、少くとも客観的に行行為者の生活の場として最も明確に存在している範囲内に、二つ以上の寺院の存在が前提として考えられている。③ある寺の属する宗派と他の寺の属している宗派とを区別する意図をもつ場合で、少くとも②の領域を超えて、宗派の区別を意味あらしめるような社会が意識され、その枠に関連してその寺院が思念されている場合である。

いま、①②③の区別を考えてみた場合、行為者が、その資格に関して異っていることが見出される。①においては個人として資格において、あるいは家の一員としての資格において考えられており、その行為の範囲も、個体の行動の範囲に客観的には規定されている。②においては、一定の地域社会、個人の生活の具体的な要求に応ずる程度において捉られるコミュニティが対象となっている。③については、一応あらゆる宗派分化とその結合形式を有する全体が問題となる。これは客観的には、各宗派の寺院が存在しておる社会とも言え、その場合、最も浅い層においては一定の地域ということが出来よう。

ところで、このような寺の考え方は、意味的には①②③の順序において決定されるが、客観的な観察の可能という面からは、逆の順序において捉えられる。区別されたさまざまな宗派の中からある一宗派が選ばれ、その宗派に属する種々な寺号・山号の中からある一つの称号が選ばれ、その寺院に対する行為のさまざまな可能性の中から、特定の一つの行為が選ばれる如きである。宗派と宗派の関係の分析に当っては、その宗派相互の関係について、その当事者の述べている関係についての表現から、その関係を明らかにするという方法と共に、客観的な存在の様式から、これを分析する方法をもとにこれが出来る。もとより、社会的には、それが意味されることによって始めて意

味をもつのであるが、このような意識の背景に客観的な規定性をもったものとして存在しているものが、このような主観的分析の枠として作用していると云えよう。

一応ここでは、関連する枠として広域社会だけを考えることにする。というのは地域をこの広い社会内で位地ずけるための試みであるから。ところで、宗派の関係を探るための手懸りは、各宗派に属する寺院の地域的な分布に限定されたわけであるが、それは具体的には、寺院の所在の接近関係ということに置きかえることが出来よう。この接近関係を考える場合、(1)宗派の接近を最も抽象的に考えた場合、寺院数を抽象して、ただ存在という点だけに限定した場合の接近関係、(2)寺院の数を含んだ意味での宗派相互の接近関係、(3)上記の類型的な接近関係の中で、特定類型が具体的社会の中で出現している状態に関するものと言った三つの水準が区別されよう。

一つの地区内に見られる寺院の接近関係は、(1)の水準においては、両宗派の接近の可能性の有無に関して問題とされている。従ってそれに対する意味づけは、極めて表層的な意味において問題とされているのであって、両派に属する寺院を支える背後の集団関係にまでは及ばない。これに対して、(2)の水準は、この両派に属する寺院のそれぞれに対する背後の力の関係までを含むものとして思念されている。さらに(3)の水準は、かかる特定の類を一定の頻度でもって、広域社会内に配置せしめる地区外に存在している一つの統一的力の状態を示すものである。その根底には、(1)(2)の水準における接近関係が予想されている。

### <近畿地域における寺院分布に現れた宗派の接近関係とその背後にあるもの>

地区を類別する場合、幾つかの基準が考えられる。(1)その地区が幾つの宗派をその中に含んでいるか、(2)その地区が幾つの寺院を含んでいるかによって区別され、これら(1)と(2)を組合せて得られる第三の類型が考えられる。

宗派の接近は地区に関する限りでは、単独宗派の独占から、八宗派すべてに属する寺院を少くとも一ヶ寺は含むものに至るまで、八類型が区別される。仮定に従って、各宗派に属する寺院が、その寺院数を考慮することなく、真に逢機的に分布しているとすれば、あらゆる宗派は、あらゆる宗派と接近可能であり、その意味では、あらゆる宗派組合せの類型は出現可能であると考える。このような、考え方方に立って現実の分布をみると表1のような結果となる。表1において、 $N_{11} = 8-1C_1$  である。すなわち、特定の宗派に属する寺院を中心として考えた場合、単独宗派地区においては、他宗の寺院は存在しないのであるから、他宗との組合せの形式は存在し得ない。2宗派の地区においては、その特定宗派以外のある宗派である可能性は、 $7C_1$  だけの可能性を藏している。従って十分広い地域を考えた場合、その地域内のどこかでこのような組合せは実現されるものと考える。この場合の組合せの出現の可能性は、かかる組合せ全体に対応するものとして考えられる。かかる可能性は、2宗派の地区に関しては、ある特定の宗派に関して、残りの7宗派のすべてが可能性を有しており、 $8-1C_{2-1} = 7$  組の組合せが考えられる。これに対して、近畿地方全体の範囲内で現

表 1

	2			3			4			5			6		
	$N_{12}$	$N_{22}$	$N_{32}$	$N_{18}$	$N_{23}$	$N_{33}$	$N_{14}$	$N_{24}$	$N_{34}$	$N_{15}$	$N_{25}$	$N_{35}$	$N_{16}$	$N_{26}$	$N_{36}$
A を 含 む	7	7	0	21	15	6	35	14	21	35	11	24	21	10	11
B	7	7	0	21	19	2	35	26	9	35	13	22	21	10	11
C	7	7	0	21	18	3	35	15	20	35	14	21	21	12	9
D	7	5	2	21	11	10	35	11	24	35	8	27	21	9	12
E	7	6	1	21	16	5	35	13	22	35	9	26	21	9	12
F	7	6	1	21	13	8	35	11	24	35	8	27	21	8	13
G	7	5	2	21	10	11	35	8	27	35	5	30	21	6	15
H	7	5	2	21	9	12	35	10	25	35	7	28	21	7	14

	7			8			$\alpha$
A	$N_{17}$	$N_{27}$	$N_{37}$	$N_{18}$	$N_{28}$	$N_{38}$	
B	7	3	4	1	1	0	$61/128$
C	7	3	4	1	1	0	$80/128$
D	7	3	4	1	1	0	$71/128$
E	7	2	5	1	1	0	$49/128$
F	7	3	4	1	1	0	$57/128$
G	7	2	5	1	1	0	$51/128$
H	7	2	5	1	1	0	$38/128$
							$42/128$

実に存在している組合せとの差が、この接近関係を示す一つの徴標として考えられる。同様に、3宗派に対しては、 $s-1C_{3-1}=21$ 組、4宗派では $s-1C_{4-1}=35$ 組、5宗派では $s-1C_{5-1}=35$ 組、6宗派では $s-1C_{6-1}=21$ 組、7宗派では $s-1C_{7-1}=7$ 組、8宗派では $s-1C_{8-1}=1$ 組の可能性が考えられている。寺院数が、地区の他の条件によって決定されたと考えるならば註)，これらの組合せは、一様に可能なものとして考えることが出来る。従って、組合せの総数 $1+7+21+35+35+21+7+1=128$ 組の中で、どれだけの組合せの中にその宗派が現われるか、その相対頻度によって、宗派の接近可能性が一つの基準を与えられる。表1の $\alpha$ の欄はかかる基準を示すものである。

ところで、積極的な接近の方向を示すものが $\alpha$ とすれば、宗派の離隔関係は、 $N_{31}$ と $N_{11}$ との関係によって示される。 $N_{21}$ は具体的に出現している組合せの数を示し、 $N_{11}$ は可能なる組合せの数を、 $N_{31}$ は $N_{11}$ と $N_{21}$ との差を示すものであって、 $N_{31}$ は出現していないものの数を示している。従って、各宗派別組合せにおいて、実現しない組合

せにある宗派相互の関係は、その程度において離隔の関係にあると言えよう。ところでこの離隔は、接近の関係におけるように、全組合せの可能性に対して考えると共に、それが宗派の特性によること極めて大であると考えられ、従って、2宗派、3宗派、4宗派、5宗派等々の区別において見られる特性が意味をもってくる。離隔は、地域全体からみた場合、可能な組合せの中での実現しない組合せが、宗派数別に異った傾向を示している。従って表2は、このような離隔の関係を示す一つの基準を提供する。ところでこのような接近と離隔の関係は、出現しない類型の分析によって、一層明瞭な形をとる。表3を参照

以下A(禅宗)、B(浄土真宗)、C(浄土宗)、D(天台宗)、E(古義真言宗)、F(真言宗)、G(新義真言宗)、H(日蓮宗)という、われわれがこれまで使用してきた略号を使用する。

単独宗派の地区においては、あらゆる宗派が存在しているので、その出現の可能性との間の相違は問題とならない。

2宗派の地区において、存在しない組合せ

$$ED = GD = FH = GH = \frac{1}{1}$$

3宗派の地区

$$GH = \frac{5}{6}$$

$$DH = \frac{5}{6}$$

$$DG = DF = FH = \frac{4}{6}$$

$$FG = EG = DE = CH = AD$$

$$= AF = AG = AH = \frac{3}{6}$$

$$BG = \frac{2}{6}$$

$$BE = BN = CD = CF = CG$$

$$= EF = \frac{1}{6}$$

表 2

宗派数	2	3	4	5	6	7	8
A	0	30/105	63/105	72/105	55/105	60/105	0
B	0	10/105	27/105	66/105	55/105	60/105	0
C	0	15/105	60/105	63/105	45/105	60/105	0
D	30/105	50/105	72/105	81/105	60/105	60/105	0
E	15/105	25/105	66/105	78/105	60/105	75/105	0
F	15/105	40/105	72/105	81/105	65/105	60/105	0
G	30/105	55/105	81/105	90/105	75/105	75/105	0
H	30/105	60/105	75/105	84/105	70/105	75/105	0

表 3

註 太字は可能な組合せ類型数を示す

	A	B	C	D	E	F	G	H	計
A		0 <b>1</b>	0 <b>1</b>	0 <b>1</b>	0 <b>1</b>	0 <b>1</b>	0 <b>1</b>	0 <b>1</b>	0 <b>7</b>
B	0 <b>1</b>		0 <b>1</b>	0 <b>1</b>	0 <b>1</b>	0 <b>1</b>	0 <b>1</b>	0 <b>1</b>	0 <b>7</b>
C	0 <b>1</b>	0 <b>1</b>		0 <b>1</b>	7 <b>7</b>				
D	0 <b>1</b>	0 <b>1</b>	0 <b>1</b>		1 <b>1</b>	0 <b>1</b>	1 <b>1</b>	0 <b>1</b>	2 <b>7</b>
2 E	0 <b>1</b>	0 <b>1</b>	0 <b>1</b>	1 <b>1</b>		0 <b>1</b>	0 <b>1</b>	0 <b>1</b>	1 <b>7</b>
F	0 <b>1</b>	0 <b>1</b>	0 <b>1</b>	0 <b>1</b>	0 <b>1</b>		0 <b>1</b>	1 <b>1</b>	1 <b>7</b>
G	0 <b>1</b>	0 <b>1</b>	0 <b>1</b>	1 <b>1</b>	0 <b>1</b>	0 <b>1</b>		1 <b>1</b>	2 <b>7</b>
H	0 <b>1</b>	0 <b>1</b>	0 <b>1</b>	0 <b>1</b>	0 <b>1</b>	1 <b>1</b>	1 <b>1</b>		2 <b>7</b>
計	0 <b>7</b>	0 <b>7</b>	0 <b>7</b>	2 <b>7</b>	1 <b>7</b>	1 <b>7</b>	2 <b>7</b>	5 <b>7</b>	
A		— <b>6</b>	— <b>6</b>	<b>6</b>	— <b>6</b>	<b>6</b>	<b>6</b>	<b>6</b>	12 <b>42</b>
B	— <b>6</b>	— <b>6</b>	<b>6</b>	1 <b>6</b>	<b>6</b>	<b>6</b>	<b>6</b>	<b>6</b>	4 <b>42</b>
C	— <b>6</b>	— <b>6</b>	<b>6</b>	— <b>6</b>	<b>6</b>	<b>6</b>	<b>6</b>	<b>6</b>	6 <b>42</b>
D	3 <b>6</b>	— <b>6</b>	1 <b>6</b>		3 <b>6</b>	<b>6</b>	<b>6</b>	<b>6</b>	20 <b>42</b>
3 E	— <b>6</b>	1 <b>6</b>	— <b>6</b>	3 <b>6</b>		<b>6</b>	<b>6</b>	<b>6</b>	10 <b>42</b>
F	3 <b>6</b>	— <b>6</b>	1 <b>6</b>	4 <b>6</b>	1 <b>6</b>		<b>6</b>	<b>6</b>	16 <b>42</b>
G	3 <b>6</b>	2 <b>6</b>	1 <b>6</b>	4 <b>6</b>	3 <b>6</b>	3 <b>6</b>		<b>6</b>	22 <b>42</b>
H	3 <b>6</b>	1 <b>6</b>	3 <b>6</b>	5 <b>6</b>	2 <b>6</b>	4 <b>6</b>	6 <b>6</b>		24 <b>42</b>
計	12 <b>42</b>	4 <b>42</b>	6 <b>42</b>	20 <b>42</b>	10 <b>42</b>	16 <b>42</b>	22 <b>42</b>	24 <b>42</b>	
A		1 <b>15</b>	10 <b>15</b>	10 <b>15</b>	10 <b>15</b>	11 <b>15</b>	11 <b>15</b>	10 <b>15</b>	63 <b>105</b>
B	1 <b>15</b>		1 <b>15</b>	5 <b>15</b>	3 <b>15</b>	5 <b>15</b>	7 <b>15</b>	5 <b>15</b>	27 <b>105</b>
C	10 <b>15</b>	1 <b>15</b>		10 <b>15</b>	9 <b>15</b>	9 <b>15</b>	11 <b>15</b>	10 <b>15</b>	60 <b>105</b>
D	10 <b>15</b>	5 <b>15</b>	10 <b>15</b>		10 <b>15</b>	11 <b>15</b>	14 <b>15</b>	12 <b>15</b>	72 <b>105</b>
4 E	10 <b>15</b>	3 <b>15</b>	9 <b>15</b>	10 <b>15</b>		10 <b>15</b>	12 <b>15</b>	12 <b>15</b>	66 <b>105</b>
F	11 <b>15</b>	5 <b>15</b>	9 <b>15</b>	11 <b>15</b>	10 <b>15</b>		13 <b>15</b>	13 <b>15</b>	72 <b>105</b>
G	11 <b>15</b>	7 <b>15</b>	11 <b>15</b>	14 <b>15</b>	12 <b>15</b>	13 <b>15</b>		13 <b>15</b>	81 <b>105</b>
H	10 <b>15</b>	5 <b>15</b>	10 <b>15</b>	12 <b>15</b>	12 <b>15</b>	13 <b>15</b>	13 <b>15</b>		75 <b>105</b>
計	63 <b>105</b>	27 <b>105</b>	60 <b>105</b>	72 <b>105</b>	66 <b>105</b>	72 <b>105</b>	81 <b>105</b>	75 <b>105</b>	
A		11 <b>20</b>	9 <b>20</b>	14 <b>20</b>	14 <b>20</b>	15 <b>20</b>	17 <b>20</b>	16 <b>20</b>	96 <b>140</b>
B	11 <b>20</b>		8 <b>20</b>	14 <b>20</b>	13 <b>20</b>	13 <b>20</b>	15 <b>20</b>	14 <b>20</b>	88 <b>140</b>
C	9 <b>20</b>	8 <b>20</b>		13 <b>20</b>	12 <b>20</b>	12 <b>20</b>	16 <b>20</b>	14 <b>20</b>	84 <b>140</b>
D	14 <b>20</b>	14 <b>20</b>	13 <b>20</b>		16 <b>20</b>	17 <b>20</b>	18 <b>20</b>	16 <b>20</b>	108 <b>140</b>
5 E	14 <b>20</b>	13 <b>20</b>	12 <b>20</b>	16 <b>20</b>		16 <b>20</b>	17 <b>20</b>	16 <b>20</b>	104 <b>140</b>
F	15 <b>20</b>	13 <b>20</b>	12 <b>20</b>	17 <b>20</b>	16 <b>20</b>		18 <b>20</b>	17 <b>20</b>	108 <b>140</b>
G	17 <b>20</b>	15 <b>20</b>	16 <b>20</b>	18 <b>20</b>	17 <b>20</b>	18 <b>20</b>		19 <b>20</b>	120 <b>140</b>
H	16 <b>20</b>	14 <b>20</b>	14 <b>20</b>	16 <b>20</b>	16 <b>20</b>	17 <b>20</b>	19 <b>20</b>		112 <b>140</b>
計	96 <b>140</b>	88 <b>140</b>	84 <b>140</b>	108 <b>140</b>	104 <b>140</b>	108 <b>140</b>	120 <b>140</b>	112 <b>140</b>	
A		7 <b>15</b>	5 <b>15</b>	8 <b>15</b>	8 <b>15</b>	8 <b>15</b>	10 <b>15</b>	9 <b>15</b>	55 <b>105</b>
B	7 <b>15</b>		5 <b>15</b>	7 <b>15</b>	8 <b>15</b>	8 <b>15</b>	10 <b>15</b>	10 <b>15</b>	55 <b>105</b>
C	5 <b>15</b>	5 <b>15</b>		6 <b>15</b>	6 <b>15</b>	6 <b>15</b>	9 <b>15</b>	8 <b>15</b>	45 <b>105</b>
D	8 <b>15</b>	7 <b>15</b>	6 <b>15</b>		9 <b>15</b>	9 <b>15</b>	11 <b>15</b>	10 <b>15</b>	60 <b>105</b>
6 E	8 <b>15</b>	8 <b>15</b>	6 <b>15</b>	9 <b>15</b>		8 <b>15</b>	11 <b>15</b>	10 <b>15</b>	59 <b>105</b>
F	8 <b>15</b>	8 <b>15</b>	6 <b>15</b>	9 <b>15</b>	8 <b>15</b>		11 <b>15</b>	10 <b>15</b>	60 <b>105</b>
G	10 <b>15</b>	10 <b>15</b>	9 <b>15</b>	11 <b>15</b>	10 <b>15</b>	11 <b>15</b>		13 <b>15</b>	74 <b>105</b>
H	9 <b>15</b>	10 <b>15</b>	8 <b>15</b>	10 <b>15</b>	10 <b>15</b>	10 <b>15</b>	3 <b>15</b>		70 <b>105</b>
計	55 <b>105</b>	55 <b>105</b>	45 <b>105</b>	60 <b>105</b>	59 <b>105</b>	60 <b>105</b>	74 <b>105</b>	70 <b>105</b>	

	A	B	C	D	E	F	G	H	計
A		3 6	3 6	3 6	4 6	3 6	4 6	4 6	24 42
B	3 6		3 6	3 6	4 6	3 6	4 6	4 6	24 42
C	3 6	3 6		3 6	4 6	3 6	4 6	4 6	24 42
D	3 6	3 6	3 6		4 6	3 6	4 6	4 6	24 42
7 E	4 6	4 6	4 6	4 6		4 6	5 6	5 6	30 42
F	3 6	3 6	3 6	3 6	4 6		4 6	4 6	24 42
G	4 6	4 6	4 6	4 6	5 6	4 6		5 6	30 42
H	4 6	4 6	4 6	4 6	5 6	4 6	5 6		30 42
計	24 42	24 42	24 42	24 42	30 42	24 42	30 42	30 42	

## 4宗派の地区

$$D G = \frac{1}{15}$$

$$F G = F H = G H = \frac{1}{15}$$

$$E G = E H = D H = \frac{1}{15}$$

$$D F = A F = C G = A G = \frac{1}{15}$$

$$E F = D E = C D = C H = A C = A D = A E$$

$$= A H = \frac{10}{15}$$

$$C E = C F = \frac{9}{15}$$

$$B G = \frac{7}{15}$$

$$B D = B F = B H = \frac{5}{15}$$

$$B E = \frac{3}{15}$$

$$A B = B C = \frac{1}{15}$$

## 5宗派の地区

$$G H = \frac{9}{20}$$

$$D G = F G = \frac{18}{20}$$

$$D F = A G = E G = F H = \frac{7}{20}$$

$$A H = D E = O H = E F = E H = \frac{16}{20}$$

$$A F = B G = \frac{15}{20}$$

$$A D = A E = B D = B H = C H = \frac{4}{20}$$

$$B E = B F = C D = \frac{1}{20}$$

$$A B = \frac{1}{20} \quad A C = \frac{9}{20} \quad B C = \frac{8}{20}$$

## 6宗派の地区

$$G H = \frac{13}{15}$$

$$D G = F G = \frac{1}{15}$$

$$A G = B G = B H = D H = E G = E H = F H = \frac{10}{15}$$

$$A H = O G = D E = D F = \frac{9}{15}$$

$$A D = A E = A F = B E = B F = C H = E F = \frac{8}{15}$$

$$A B = B D = \frac{7}{15}$$

$$C D = C E = C F = \frac{6}{15}$$

$$A C = B C = \frac{5}{15}$$

## 7宗派の地区

$$E G = E H = G H = \frac{6}{15}$$

$$A E = A G = A H = B E = B G = B H = C E$$

$$= C G = C H = D E = D G = D H = E F =$$

$$F G = F H = \frac{4}{6}$$

$$A B = A C = A D = A F = B C = B D = B F = C D = C F = D F = \frac{3}{6}$$

8宗派の地区は類型としては、一つだけを有するものであるから、離隔の面では存在しておらない。

以上の離隔の関係は、2宗の関係として捉えられたものである。従って、かかる2宗派の組合せたものと、他の宗派との組合せの仕方が問題とされなくてはならない。このことは実は(2)の水準の問題として考えられる。

宗派組合せの類型によって、宗派相互の接近と離隔を論じた。表4はこの接近・離隔の関係を示した一覧表である。この表において明らかのように、最も遠い関係にあるものは、DH, DG, FH, GHであり、以上順に下方に下る程、離隔の性質は限定されてくる。

表 4

地区の宗派数	2	3	4	5	6	7
DE	1/1	3/6	10/15	16/20	9/15	4/6
DG	1/1	4/6	14/15	18/20	11/15	4/6
FH	1/1	4/6	13/15	17/20	10/15	4/6
GH	1/1	6/6	13/15	19/20	13/15	5/6
DH	5/6	12/15	16/20	10/15	4/6	
DF	4/6	11/15	17/20	9/15	3/6	
FG	3/6	13/15	18/20	11/15	4/6	

E G	3/6	12/15	17/20	10/15	5/6
C H	3/6	10/15	14/20	8/15	4/6
A D	3/6	10/15	14/20	8/15	4/6
A F	3/6	11/15	15/20	8/15	3/6
A G	3/6	11/15	17/20	10/15	4/6
A H	3/6	10/15	16/20	9/15	4/6
B G	2/6	7/15	15/20	10/15	4/6
B E	1/6	3/15	13/20	8/15	4/6
B H	1/6	5/15	14/20	10/15	4/6
C C	1/6	10/15	13/20	6/15	3/6
E F	1/6	10/15	16/20	8/15	4/6
A C		10/15	9/20	5/15	3/6
A E		10/15	14/20	8/15	4/6
E H		12/15	16/20	10/15	5/6
B D		5/15	14/20	7/15	3/6
B F		5/15	13/20	8/15	3/6
F H		13/15	17/20	10/15	4/6
C G	1/6	11/15		9/15	4/3
B C		1/15	8/20	5/15	5/6
C E		9/15		6/15	4/6

ところで、この接近・離隔の性質は決してその強度を示すものではない。宗派の可能な組合せの中であるものが広域社会の中で現われ、あるものが出現し難いということは、可能性の程度を示すがものであって、その接近そのものないし離隔そのものの強さの程度を示すものではない。この問題は、地区内に含まれる寺院数を考慮して構成した類型の数の問題となってくる。寺院数の比重を附加した場合の類型の数は次のように考えられる。寺院数  $n$ 、宗派数  $m$  の地区について考えることの出来る類型の数は、宗派数 1 の場合には、 $1 \times_8 C_1 = 8$ 、この場合、 $(n-1) \times_8 C_2$ 、3 の場合、 $\frac{(n-1)(n-2)}{2!} \times_8 C_2$ 、

4 の場合、 $\frac{(n-1)(n-2)(n-3)}{3!} \times_8 C_4 \dots m$  宗派の場合  $\frac{(n-1)(n-2)\dots(n-m)}{m!} \times_8 C_m$  但し  $m \leq 8$  とする。

ところで、現実には上にあげたように、宗派相互に結びつくことを許さないことが考えられ、具体的な可能性はこれらの組合せを引いたものにおいてはじめて可能な全体として考えることが出来る。(表 5)

この問題は地区の評価に当って起りうるケースと現実のケースの数の比較とその差に意味を認め

ることに問題があった。いわば  $m_1$  宗派、 $n_1$  寺院の場合と、 $m_2$  宗派、 $n_2$  寺院の場合……、さらに一般的に  $m_i$  宗派、 $n_i$  宗派の場合のすべてを統合する原理はどのようにして得られるかにかかってくる。(2)の水準によって、宗派相互の接近・離隔の強度を論じうることが明らかになった場合、具体的な分布を決定する力の問題は明らかにされてはいない。これはまた地区分布の問題に還元されるが、一応ここでは  $(A + B + C + D + E + F + G + H)n$  における多項係数による比重の問題となることを指摘しておこう。

以上、宗派相互の関係からみた地区評価の基準を示し、それが社会の表層から深層に向って明確化されるべきであるとの提案を行ったのである。ところで、推論の過程において一つの反省が必要となった。というのは、本論の出発点をなしている宗派分類の問題に関して重大なる誤りがあったのではないかということに気付いた為である。上述の(2)(3)の水準の分析に際して、その類型数の分散が、あまりに甚だしく、これの統合は殆ど不可能となった。(1)の水準は極めて常識の範囲との一致が高く、このような枠に制限された行為とを予想出来るが、(2)(3)の水準においては、理論的に解釈し難いとの結論に達した。ということは、次のような前提をいま一度考慮してみると始めることが要求された。現在の分布は、歴史的過程の中で齊一化された結果であるという前提である。この前提の中には二つのことが含まれている。(1)宗派の歴史的变化は長い過程の中で寺院分布の様相を全面的に変化せしめるか、あるいは宗派の変化は寺院分布に本質的影響を及ぼさないかの何れかである。(2)同一宗派内の教團的相違は本質的な差はない。という二つの問題である。

まず前者の問題から取上げると、例を浄土宗にとってみよう。浄土宗が法然によって開かれた当時、そしてその後を継いだ弟子たちにとって、念佛を通じて念佛者として生きて行くことが目的であった。それが如来との結びつきを深めて行くものであれ、在家人との結びつきを深めて行くものであれ、念佛に生きることこそ第一の目的であったと考えられる。これに対して、徳川氏が政権を

握り、家康が入府すると、やがて僧上寺と徳川家の間に、師檀関係が結ばれ、徳川幕府の寺院政策に支えられて、幕藩体制の一翼を担うものと化していった事実が注目される註<sup>1</sup>。このことは浄土宗寺院分布に、二つの異った部分が考えられることを意味するものである。このことは浄土宗寺院分布をいま一度検討することを要求した。(表6)

表 6

	1寺—10寺	12寺—20寺	27寺—72寺	第一分類
平均	2.98	14.20	46.25	
分散	6.03	5.07	223.20	
	1寺—20寺	27寺—72寺	第二分類	
平均	3.66	46.25		
分散	13.13	223.20		

このような事実は、浄土真宗の場合においても蓮如時代以前とそれ以後、特に徳川幕府の寺院政策との関連を物視することは出来ないように考えられる。一応、このことはあらゆる宗派において考えられ、分布に関してはこの問題は重要な問題と思われる。

次に後の問題について、禅宗を取り上げると、曹洞宗と臨済宗の統計的性格を対比して考えると第7表のようになる。

表 7

	曹洞宗	臨済宗
平均	2.11	2.25

分散 3.08 12.01

両者において、その平均に殆ど異なるところはないが、その分散において異っている。このことは道元の凜烈なる宗風、そしてそれに続く王法即仏主義に基づく民衆化運動、就中、その実践運動の方向と、天台・真言の系譜の上に立つ栄西の宗風を襲うものとの間に大なる隔たりのあることを示すものではあるまいか。まして、その後における宗風の変化を考え併せるならば、この二宗と雖も、さきにあげた浄土宗と同じ意味において問題となる。瑩山紹瑾における世俗への調和は曹洞宗におけるこの一例として考えうるであろう註<sup>2</sup>。

このことは、臨済禅と曹洞禅における外護者を考慮する場合、一層明瞭になってくる。極めて簡単な以上の分析によっても、宗派分類に対する反省の必要が明らかとなった。従って寺院分布は、創立の時代区分、教団的分派をも考慮していま一度地域評価の具体的分析が行われるべきことを附言しておく。

附言 本論は既に人文論究に載せた I・II に続くものであることをお辞りしておく。

註 1 井上光貞「日本浄土教成立史の研究」

2 鈴木泰山「禅宗の地方発展」

(未完)

—関西学院大学社会学部助教授—

